私の最高傑作は冥王です

屋猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の最高傑作は冥王です

【Ｎコード】
Ｎ４３２７ＢＡ

【作者名】
屋猫

【あらすじ】
魔女のジュラは魔の森で魔剣に体を貫かれた男を見つける。
その男を憐れに思ったジュラは、男の命を助けたのだが・・・
後に冥王として奈落の王となる魔剣士オズウェルと、冥王を生み出してしまった魔女ジュラのお話し。

1　魔の森〈ナロモミ〉にて（前書き）

初投稿です

1　魔の森〈ナロモミ〉にて

ジュラは薬と防具の練成に使用する材料を調達し、魔の森（ナロモミ）の空を帰途についていた。

しかし突然、乗っていた騎獣が警戒態勢に入ったのだ。

騎獣の様子から魔物の気配ではない。騎獣が警戒しているほうへ慎重に近づいてみる。

やがて、騎獣が警戒していたものが何なのかジュラにも分かった。

血の臭いだ。濃い血の臭いが立ち込めている。それは、上空にいる防護布を口につけている、ジュラの所まで漂ってくる。

今は見えない地上は、どんな状態になっているのか。

しかし、ジュラが現在いる場所は魔の森（ナロモミ）とはいえ、その入り口付近である。最深部でもないのに、凶暴な魔物が出る事はまずない。

「・・・はぐれ妖魔でも出たのかなぁ」

地上には生き物の気配はない。鬱蒼と茂る木々の間から、様子を窺うことは出来ない。だが、騎獣も血の臭いを警戒しているだけで、危険はなさそうである。

定期的に魔の森（ナロモミ）に来る身としては、様子を確認するくらいしておいた方がいいだろう。

騎獣に地上に降りるように指示する。ゆっくりと地上の様子が見えてくると、そこは血の海だった。

魔の森（ナロモミ）の大地は、土地全体が魔の瘴気を帯びているために青白い。そして草木は灰色を帯びてくすんでいる。

だがジュラが降り立ったそこは、辺り一面、鮮やかな赤に染め上げられていた。青白いはずの地面も、灰色の草木も赤い。真っ赤だ。

所々にみえる白っぽい物は、骨や肉片だろう。元の原型を判別するのは難しいが、人間だったようだ。

よくみると、赤い海には剣や鎧が沈んでいる。それから判断するに、どこかの国の騎士たちの物のようだ。

――・・・魔術の気配がする。何かの儀式かなぁ？

ざっと周囲の様子を見たジュラは、空間に立ち込める魔術の気配にに気付いた。魔女であるジュラが使う魔法とは構造が違うため、はっきりとは解らないが、何かを成す為に儀式的な魔術が行われていたようだ。

――複数の魔術の気配がする。複雑な構築をしているみたいだけど、・・・失敗したのかなぁ。

血の渇き具合から、半日近く経っているようだ。構築されていた魔術は殆ど拡散して、その全容は掴めない。残った余韻が獣達を遠ざけているが、それも直ぐに消えるだろう。明日には僅かな痕跡を残して、獣や下位の魔物が全て片付けてしまうに違いない。

ジュラはこの場に留まっても得られる情報はもうないと、その場を発とうとした。

だがしかし、その時、微かな命の気配を感じた。
この地獄のような場所の中央付近。魔術の気配が一番濃い辺りだ。人間がこの場で生き延びているとは思えない。気のせいかもしれないが。

ジュラが中央に近づくと、はたしてそこには、人間が生きて居た。

「驚いたこと。こんな状態で、生きているなんてねぇ」

その人間は全身血まみれで、肌の色も髪の色も分からない。体格からして男だろう。だが、背丈は解らない。
四肢が膝、肘辺りで千切れていたからだ。胸に中ほどで折れた両刃の剣が刺さっている。しかし、その胸は上下しているのだ。

「これは、・・・この剣に生かされているのかなぁ？」

男の状態はどう考えても人間が生きているはずのないものだ。上級魔族の中でも再生能力の高い者で無ければ、瀕死の状態だ。

「抜けば、死ぬかな？・・・いや、うーん、剣に魔力が？魔術が半端に起動してるのか？・・・抜いたら妖霊化しそうだなぁ。」

男に突き刺さっている剣。おそらく行使された魔術の影響で、不完全な魔剣と化しているようだ。　その剣の魔力の影響で男は死なない。しかし、半端な魔剣は、男を再生するほど魔力を持たないため男を回復させることは出来ず、結果的に

「死ねない状態でここに・・・。剣を埋め込めば、助かるかなぁ？いや、体は治るかもしれないが・・・、精神がどうなるか」

ジュラは男の状態を詳しく観察して、深く溜息をついた。このまま放っておけば、十中八九男は妖魔化するだろう。それも、ここに漂う数知れない無念の霊を抱えて。剣を抜けば男は死ぬが、その魂は魔術の影響を受け霊体の妖魔、妖霊となりそうだ。

男に刺さっている剣を浄化し、抜いてしまえば良いのだろうが、

「困ったな。このまま放置するのは物騒だが、解放することも出来ないし」

魔女のジュラは魔法を使うことができる。魔法は人間が使う魔術よりも高度で複雑な事象ををひき引き起こすことができるが、万能ではない。

そして、人間の使う魔術は欠陥が多く、魔法で強引に干渉すると魔力が暴発してしまうことがあるのだ。

抜くには、中途半端に作用している魔術に魔法で干渉しなければならないだろう。

「・・・仕方ないな。家に持って帰るかぁ」

2　黒い森〈ミリロコウ〉にて

森で半死半生の男を見つけてから１３日目。ジュラは黒い森（ミリロコウ）にある、自宅に篭っていた。

ジュラは一年の半分を素材集めの旅、残りの半分を練成に費やしている。数ヶ月旅に出る事もあれば、同じく家に篭る事もある。

ジュラの自宅は、生活区間と錬金術を行う工房、そして、騎獣を飼育している小さな牧場で構成されている。

生活区間は千年を超える霊樹と融合しており、その地下は、試験的な魔法を行使する特殊な空間となっていた。

地下は霊樹の根があちこちから顔を出している。その根が、魔法の暴発を防ぐのだ。

地下の一番奥、根が絡みつくように白い塊を支えていた。３メートル以上はありそうな巨大な塊である。表面が細かい糸で覆われ、虫の繭の様だ。

白い繭は鼓動のように淡い明滅を繰返している。ジュラは繭にそっと手を触れ、目を閉じて瞑想しているようだった。

「今晩、あたりかな」

繭から手を放すと、ジュラは眉間に皺を寄せて黙り込んだ。

そして視線を地下にある棚に移す。

地下の棚には、様々な魔具が置かれている。ローブ、楯、鎧など

の防具。剣、弓、斧、杖などの武具。聖気、邪気を帯びているものなど様々であるが、その中にガラス瓶に入った剣があった。

魔の森（ナロモミ）で男を貫いていた剣だ。折れた剣は赤黒く血に濡れたままで、本来の色は分からない。

そして、剣の先には脈打つ心臓が突き刺さっていた。

ジュラは男を家に連れ帰り、剣と男の肉体を分離させようとした。霊樹の根が守る地下でなら、多少強引でも問題ないだろうと判断したからだ。

しかし、予想外の問題が発生したのだ。中途半端に魔剣と化していた剣は、これまた中途半端に男の肉体と融合していた。

行使された魔術と魔の森の瘴気、そして辺りに満ちていた無念の怨念が重なり、男の肉体を人ならざるものへと変えてしまっていた。

男の体は半分魔剣となっていたのだ。折れたように見えた剣は、その半分が男の体に溶け込んでしまっていた。

ジュラは当初、男と剣を分離し、剣は浄化して無に返し、男も人間として葬るつもりだった。

そもそも、剣が分離してしまえばその力で生きながらえている男は、死んでしまうはずだった。

しかし、計画的に起きた魔剣化ではないので、融合の仕方が複雑でなおかつ不完全なため、分離が不可能な状態になっていた。

男と剣を滅する方法もあるが、ジュラの魔力では魂までは滅ぼせない。深い恨みを抱えた魂は世界にとって、厄災にしかならないだろう。

残る選択肢は男も剣も一緒に封印してしまうことだ。
それを霊樹の根元に埋めてしまえば、半永久的に見つかる事もないだろう。
そして、男も死地の境を半永久的に彷徨うことになるのだ。

ジュラはこの男が何処の誰なのか、善人か、悪人か、名前すら知らない。

だが、ジュラは赤の他人であるこの男の境遇が、とてつもなく憐れになった。

だから、助ける事にしたのだ。人間でも無く、魔剣でもなくなってしまったこの男を。

失われた四肢の代わりを生成し、男の肉体と繋げた。
欠損していたのは他に、左目、臓器が幾つか、それらも全て入れ替えた。
脳が無傷だったのは幸いだった。脳の再生は骨が折れるし、失敗しやすい。

おそらく、再生されなかった箇所は、魔剣が男を貫く前に負った傷だろうと思われた。ゆえに、魔剣は男の完全な状態を知らない、よって完全な再生が行われなかったのだ。

「止めを刺すために使われた剣が、その命を繋ぐなんてねぇ。」

男の肉体を改造しながら、ジュラはぽつりと呟いた。

だが、そこである考えが胸をよぎる。

――この剣が、男を殺すための物ではなく、この状態で生かし続けるためのものだったら？

その考えにジュラはぞっとする。人間は愛情深い者いるが、同じくらい残酷で冷酷な者もいることを、ジュラはよく知っていたからだ。

あらかた肉体の差し替えが終わると、元の肉体と馴染ませるために、男の体を妖天の繭の中に入れ特殊な羊水で満たした。

その作業に三日ほど掛かったが。その間も男と魔剣の融合は少しずつ進んでいた。男の体から出ていた部分は、当初の半分もない。

男を繭に入れてから１０日。魔剣は殆ど男の心臓と融合していた。棚に置いてある瓶は、魔剣の様子を見るための魔具だ。

今夜は満月、月が真上に来る頃には男と魔剣は完全に融合するだろう。そして妖天の繭は破れるはずである。

「結構無茶な繋げかたしたからな、ちゃんと人の形になってるかなぁ？」

3　満月の夜に

夜空に大きな満月が輝いている。魔力が満ちている黒い森（ミリロコウ）では、他の地域よりも大きく目に映る。

ジュラは居間の一階の暖炉の前で、騎獣のヴァスとまどろんでいた。

ヴァスは巨大な黒い虎の妖獣である。天虎（てんこ）と呼ばれる、東方の大陸に住む妖獣で、空を飛ぶ事ができる大型の騎獣だ。

天虎（てんこ）は気性が激しく、人にはまず馴れないが、足が速く頭が良いうえに戦闘能力も高い。小さい幼獣のころから育てれば、素晴しい騎獣になる事で有名である。

天虎（てんこ）は白い毛皮に黒い縞模様が美しい妖獣なのだが、極稀に黒い体毛を持つものが現れる。

ヴァスは黒地に朱金の縞をもつ、黒天虎（こくてんこ）だ。

ジュラは極上の黒毛皮に埋もれながら、睡魔と闘っていた。

「ううん。眠い、眠いよぉ、ヴァス。・・・ね、たら・・・駄目、なの・・・に」

男を連れ帰ってから二週間近く、ジュラは働きづめだった。一つのことに没頭すると、周りの事が見えなくなる研究者気質のあるジュラは、不眠不休で男の再生作業を行っていたのだが、ここで限界が来てしまった。

騎獣のヴァスは太く逞しい尻尾でジュラの頬を撫っていたが、主

人が完全に眠りに落ちてしまった事を確認すると、ジュラを包みこむように自分も寝る体制に入ってしまった。

ジュラは小刻みに揺れる振動で目が覚めた。誰かがジュラの体を揺さぶっている。

連日連夜の作業ですっかり深い眠りに落ちていたジュラにとっては、とても不快なものだ。

「うう、あと、少しだけ、・・・あと少しで、・・・少し・・・で？」

もう一度、眠りの世界に落ちようとヴァスの毛皮に縋りつきかけたジュラは、突然跳び起きた。

「あと、少しで生まれるじゃんかぁ！」

ヴァスは突然大声を上げたジュラに迷惑そうな視線向けたが、直ぐに目を閉じて寝てしまった。

「い、今、何時だ。どのくらい寝こけてたぁ！」

ジュラは寝起きで乱れた髪もそのままに、立ち上がろうとして、出来なかった。

「え？う、わあ、あ！・・・ゆ、ゆ、揺れてる？」

先ほど感じた小刻みな振動は、家の床が揺れているためのものだった。それは徐々に大きくなっているようで、ジュラは床から立ち上がる事が出来ず、座りこんでしまった。

イスが倒れ、棚の瓶が落ち、籠の中の物が散乱する。
揺れはどんどん激しくなり、棚や大きな壷までもがぐらぐらと揺れ始めた。

「霊樹の根が、震えている？・・・まさか、そんな、魔力が暴走しかけてぇえ、あわわぁ」

暖炉の前から動くことが出来ないジュラを、ヴァスが口に銜えると裏口にある騎獣専用の入り口から、外に飛び出た。
ジュラは家の外に飛び出してから、目に飛び込んできた光景に呆然とした。

「れ、霊樹が、・・・そんな馬鹿な。」

ジュラが住居にしている霊樹は、マルガゴクと呼ばれる木の変種である。魔力を根から吸収し葉に蓄積するという特徴を持つ。そして、本来は人の背丈ほどにしか成長しない。

だが、ジュラの住む霊樹は突然変異により、幹が一軒家ほどもある巨木に成長して霊樹となった。大きさも異常だが、木が蓄える魔力量も尋常な量ではない。
マルガゴクは、魔力と清水を糧に成長するので、それさえ枯渇しなければ枯れることはないのだが。

「霊樹が、か、枯れてる！」

ジュラはヴァスの背に乗り霊樹の様子を視て廻り、愕然とした。

青々と茂り、夜の暗闇の中でも魔力に満ちた葉はキラキラと輝く。幹は逞しく、大地に伸びる根も力強い。

魔女の森とも呼ばれる、アンティヤクティカにある、母なる木程ではないが、美しい大樹だ。
その霊樹は、枯れようとしていた。瑞々しかった葉は茶色く萎み、幹は輝きを失い、いくつもの亀裂が入っている。根にはまだ輝きが残っているが、それも徐々に失われているようだ。おそらく急激に魔力を失ったためだろう。

ジュラが感じた振動は、霊樹の幹が枯れ崩壊し始めた為に発生したものだった。

ヴァスの背に乗り、空中にいるジュラには振動はつ伝わらないが、目視で視る家は激しく揺れているようだ。おそらく家の中は見るも無残な状態だろう。

「そんなぁ！こんな破壊的に魔力を使う魔法なんて、使ってないのにぃ！」

ジュラが霊樹の無残な姿に、思わず叫ぶと、霊樹の崩壊と振動が止まった。
良く視ると根の部分は僅かに輝きが残っている。完全に枯れてしまうことは無かったようだ。

――・・・あれか？これは、あれが原因か？・・・あの人間と魔剣か？

霊樹とその根元にちょこんとくっ付いている我が家を視界に入れながら、ジュラの思考はぐらぐらと揺れたままだった。

――人間だぞ！霊樹の魔力吸い尽くすって、どんだけじゃい！・・・あれか、適当にくっ付けた手足の素材の、あれとか、それとかか！

心中でぶつぶつと呟きながら、ジュラはゆっくりと家の方に近づいた。
補強と改修の自動魔法を掛けている家は、思ったほど外見的な被害は少なく、修復も始まっていた。
ヴァスには牧場に戻るように指示を出し、ジュラは家の中に入る。
――・・・んー、徹夜の乗りと勢いで作ったからなぁ。何混ぜたかなぁ。正確に思い出せないぞ。まずいなぁ・・・
家の中は竜巻が中を通過したようなひどい有様だったが、二体のゴーレムを起動させてさっさと地下室に向った。
地下は予想より遥かに状態が良く、物も散乱しておらず、むしろ何時もよりきれいで
「きれいすぎだぁ！・・・作った魔具が、全部！・・・無くなってる！」
それはジュラにとって、霊樹が枯れる光景よりも衝撃的な光景だった。
ジュラが今まで制作、或いは手に入れ改造してきた数々の魔具。それも厳選した魔具ばかりをこの地下に保管して合ったのだが。
「ない、・・・ない。・・・一つもない！焔竜王の剣も、鳳凰弓も、邪剣アグニグルも、聖賢天の篭手も、自信作の飛仙刀もぉ！」
所狭しと並べていた、自慢の魔具たちは綺麗さっぱり消え、棚しか残っていない。
そしてこの空間にあるのは空の棚と、魔具の消失に真白になった

ジュラ、そして

「・・・ん、今、何か音が？・・・あれ、何しに地下に来たんだっけ？」

物音でショックから僅かに立ち直ったジュラは、本来の目的を思い出し、慌てて妖天の繭のところに向う。

「あれれ？・・随分、ちいさい、・・・なぁ？」

繭は破れたところが下となり、中のものは見えないが、盛り上がりの部分から、中の大きさを予想する事は出来る。

それは明らかに、小さい。

四肢を繋ぎ、繭に入れた時はジュラより遥かに大きかったはずだ。

目の前の塊は、四肢を繋ぐ前よりも小さくなっている。

「失敗かぁ？でも、息は・・・してるねぇ」

ジュラは白い繭の塊にそっと近づくと、繭をそっと破いた。

「・・・こ、ども？」

白い繭の中には、黒髪の子どもが横たわっていた。１０歳ほどだろう。足を抱え込むようにして折り曲げ、胎児のように丸まり横たわっている。

「おかしいなぁ、・・・逆行の魔法なんて、使ってないぞ？」

おそらくこの子どもは、あの魔剣と融合した男なのだろう。繋げた手足には薄っすらと、見覚えのある魔法の刻印が残っている。

――・・・予定外の事だらけだなぁ。人の原型留めてないほうが、まだ納得できるわぁ。・・・性別も変わって、・・・ない。

「う・・・ん」

ジュラが子どもの足に触れたとき、子どもが僅かに声を上げた。
子どもの顔を見ると、目蓋の下で眼球が動いているのが分かる。覚醒が近いようだ。
ゆっくりと黒い睫毛が持ち上がる。右目は紫眼、左は金眼のオッドアイだ。
焦点が合わないのか、異色の眼は僅かに視線を彷徨わせていたが、覗きこんでいるジュラに気付いたようだ。

ジュラは笑顔を浮かべながら、まだ完全に覚醒していない子どもにゆっくりと、優しく話しかけた。

「私はジュラ、土の魔女のジュラ。」

「・・・ジュ、・・・ラ？」

「そうそう、あなたの名前は？・・・自分の名前が分かる？」

「・・・名、前・・・名前は」

子どもの声は掠れていて、聴き取りづらいものだった。
ジュラの質問に子どもは視線を彷徨わせる。思い出そうと記憶を探っているようだ。

「オ、ズ・・・ウェル。・・・名前は、オズウェル」

4　魔女の家にて

漆黒の髪は艶やかな輝きを放ち、肌は傷一つない白磁の陶器のようである。黒い睫毛に彩られた目の中には、紫水晶（アメジスト）と琥珀（アンバー）色の宝石が輝いているが、今は目蓋に覆われて見ることはできない。
形の良い眉に、すっと筋の通った高い鼻梁。唇は薄く、引き締まった印象を与える。それらのパーツは絶妙に配置され、少年を絶世の美少年にしていた。

――・・・おかしい。子どもになる要素も、美形になる要素もいれていない、・・・はず

ジュラは寝台に横たわる少年、オズウェルを見下ろしながら困惑していた。
地下でオズウェルは自分の名前を告げると、力尽きたのか気絶してしまった。気絶したオズウェルを地下から運び出し、二階の寝室にある寝台に寝かせたのだが。

「繋げた四肢も、入れ替えた器官も正常に馴染んでる。」

左手で魔法を展開し、右手に持った魔具の筆で記録をつけていく。オズウェルの経過は、実に順調だった。順調過ぎて異常なほどに。

「精神的な異常も・・・現時点では、なしと」

一通りの診断を終えると、ジュラはオズウェルに毛布と布団を掛け、一階の居間へと降りた。台所でお茶を入れると、それを手に一階にある書斎に入っていった。

棚だけでなく床にも本が積まれた、本だらけの書斎に入る。本に埋もれるように鎮座している机に茶器を置き、机の上にある赤い革表紙を手にとる。表紙には円を描く大蛇が描かれている。最初の合成獣（キメラ）と言われている、大地を喰らう蛇（レスブリスカ）だ。

ジュラがオズウェルを再生する際に用いたのは合成の魔法。つまり、欠損部分を他の動物の部分と合成させることによって、補おうとしたのだ。補う部分は人間のものと比べても見分けがつかないように、副原料を合成したりして加工していた。

「ええと、合成に使ったのは、と。竜の血、トルワの涙、燃えさかる羽、竜の息、絶望の溜息、黒檀、ヴァスト隕石の粉・・・」

ぶつぶつと呟きながら、ジュラは使用した素材を整理していく。この本は合成獣（キメラ）を生成する際に、使用した材料、魔力などを記載した記録ノートである。

「副原料が５８、っと。主原料は６個。・・・んん？６？」

オズウェルは四肢と左目が欠損していた。臓器も幾つか損傷していたが、臓器の生成には副原料しか使用していない、主原料にはオズウェルの臓器を利用した。

なので主原料は両腕、両脚、左目の計５個のはずなのだが。

「んん？六個使用したって書いてあるけど、五個しか材料名が書いてないなぁ、書き忘れか、書き間違いかな？・・・あぁ、駄目だ、この記録すら正確じゃないなんて」

ジュラはぐったりと机にうつ伏せた。目視でも魔法でも、オズウェルに異常なところは見られない。健康そのものである。しかし、それは本来であればおかしな事だった。

ジュラはオズウェルが魔剣に貫かれた状態しか知らない。それ以前どのような容貌をしていたかは全く知らないが、魔剣と融合していることを除けば、完全な人間だった。

そして、欠損していた四肢は人間以外の物で補っている。ということは、少なからず拒否反応が出るはずだった。

合成獣（キメラ）は合成する数が増えるほど能力が増え、反対に完成体の知能が落ちるという副作用が存在する。最初の合成獣（キメラ）、大地を喰らう蛇（カ）は数百の動植物を合成して誕生したと云われているが、破壊の本能しか残っていなかったという。

レスプリスカは、五つの山々を喰らい、三つの湖を飲み干して、最期はゾルディア山の溶岩を飲み干さんとして燃え尽きたと云われている。

オズウェルの合成に使用した数は、知能を保てるかぎりぎりの数だった。ジュラは人型の合成獣（キメラ）を造った事はないので、副作用の予測も出来なかったのだが。

「これは、あれか。子供化と美形化が、副作用か。・・・そんなの、聞いた事ないわぁ」

不思議な点はそれだけではない。オズウェルと融合したはずの魔剣、そして、消えた多くの魔具。

無機物と生物を融合させると、生物に何らかの奇形が現れるはずなのだが、オズウェルの身体は人の肉体そのものである。欠損している箇所も、異常な箇所もない。つまり、融合したはずの魔剣の影響が現れていない。

消えた魔具については、皆目見当もつかない状態であった。

「まぁ、・・・いいかぁ。なるようになるさねぇ」

ひとしきり項垂れたあと、ジュラは観念したかのように席を立った。

――子供用の服を制作しないとな。・・・確か、キール綿が残ってたはず。

4　魔女の家にて（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
励みになります。

5　魔女と少年

オズウェルは三日間程眠り続けた。
三日の間に、ジュラはオズウェルの服を数枚制作した。靴も二足作り、ローブまで作ってしまった。
四日目の朝。オズウェルは二階の寝室で目覚めた。

「おはよう、オズウェル。良く寝たねぇ。気分はどう？」

「・・・おはよう、・・・ジュラ、さん。・・・気分は、大丈夫、です」

オズウェルの表情は何処か茫洋しているようで、応えもぎこちない。

「薬湯だよ。・・・ゆっくり飲んで。」

ジュラはオズウェルに薬湯の入った器を渡すと、飲む介添えをした。

「オズウェル、少し話せる？無理なようなら、もう少し寝てていいよ」

「・・・いいえ。大丈夫です。話せます」

オズウェルが薬湯を全て飲み終えたのを確認すると、ジュラは彼に話しかけた。今度は先ほどよりも幾分、しっかりとした答えである。

「そう？無理はしないで、ね？」

「ええ、分かりました」

ジュラはオズウェルの異色の目を覗きこみながら、その目がしっかりと見つめ返してくるのを確認してから、話し始めた。

「名前は、オズウェル、で間違いない？」

質問にオズウェルは小さく頷く。

「ここは黒い森（ミリロコウ）。私は霊樹の根元に住む、土の魔女のジュラ。魔（ナ）の森（ロモミ）で、オズウェルが怪我をしているところを見つけて、まぁ、助けたんだけど」

魔の森（ナロモミ）で一体何があったのか、そして、オズウェルと、あの魔剣は何なのか。ジュラはどれから尋ねたらよいの分からず、一旦会話を止めてしまった。

第一、オズウェルがそのことを記憶していない可能性も高いのだ。自分が何者であったのかすら、覚えていないかもしれない。

「私は、ソルスト帝国の騎士でした。ゾルウェストの森、魔女はナロモミと呼びますが、その近辺の集落に、魔物が出没したので討伐に出向いていました。」

オズウェルは話すのをやめたジュラの代わりに喋りだした。

「魔物自体は下位のスカルビーストでしたが、数が多く、討伐には数日掛かりました。魔物は森の近くの遺跡が発生源のようで、原因を突き止めるために内部に入りました。私は、小隊を率いていま

したが、その３０人全員が遺跡に入ると、魔法陣が発動し気付いたら、森の中にいました」

「魔法陣？」

「はい。天井に描かれていたので、発動するまで気付かなかったのです。」

オズウェルはそこで、視線を逸らした。
それまで話しを聴いていたジュラは、驚いていた。オズウェルの話しの内容にではない。
オズウェルが全く知能を失っておらず、おそらく記憶にも甚大な欠損が見られないことに対してだ。

「おどろいた。良く、覚えているねぇ」

ジュラの心のからの感嘆の言葉に、オズウェルは微笑を浮かべた。
それは、子どもの姿には似つかわしくない艶を含んだものだったのだが、

「ええ、それ以降の事も、全て、覚えています。」

「そう、それ以降の、事も、・・・え？」

「身体が動かず、声さえ出ない状況でしたが」

オズウェルの告げた言葉はジュラに思考を一時停止させた。彼が言っていることが正しければ、ジュラが施術をしている間も、彼の意識は起きていたことになる。
四肢を別のモノにすげ替えられ、器官を組み替えられている間の

三日間を、ずっと！

「意識は、はっきりしていましたが、視界は不鮮明で良く見えませんでした。左目も潰れていましたしね。気配だけしか、分かりませんでしたが」

ジュラはオズウェルの話していることが、すり抜けていくようだった。

ソルスト帝国は中央大陸にある人間の大国の一つである。そこの騎士ということは、人間で間違いないだろう。小隊を率いていたということは、貴族であったのかもしれない。

「一人で森の中にいた間は、地獄でしたね。知覚や痛覚は正常に働いていたので。心臓が脈打つたびに、灼熱の杭を打たれているようでした」

オズウェルは実に穏やかに話している。子どもの姿には、些か似つかわしくない落ち着き振りでは在るが、本来の年齢でないから感じる違和感だろう。

だが、それ以上に違和感を感じるのは

「気が狂いそうでした。でも、正気を失いそうになると、それも正常に修復されました」

自身が受けた惨状を、穏やかに、微笑さえ浮かべて喋っている、オズウェル自体だ。

人間が、それほどの仕打ちを受けて正常でいられるわけがない。例え魔剣の力で強制的に正常に戻されていたとしても、その影響が

消え、記憶だけが残った人間が、正常な精神を保てるだろうか。

淀みなく喋り続けるオズウェルは、美しい少年である。数年後、美青年になることが約束されているような、容貌をしている。

死にかけの人間と、半端な魔剣。寄せ集めの材料から生まれたとは思えない、完璧な肉体。

そう、妖天の繭から出てきたオズウェルは、とても合成獣（キメラ）には見えなかった。

まるで、そのまま産まれ出でたかのような、完成された肉体だったのだ。

「オズウェル」

「何ですか？」

「あなたは、一体、何ですか？」

呆然と呟くジュラに、オズウェルは僅かに沈黙した。答えを探しているようだったが、ふと、艶やか笑みを浮かべると、ジュラに

「さぁ、わかりません。それに、私を創ったのは、ジュラさんでしょう？」

と、囁くように答えた。

5　魔女と少年（後書き）

ばたばた投稿したせいで、誤字がわんさかある気がします。

6　大地の女神

ジュラは、一年の半分を素材集めの旅に費やし、残りの半分は家での制作の時間に充てている。

制作するものは、防具、武器、などの魔具が中心だ。薬なども作るが、自分自身が使う程度にしか生成していない。

魔具を制作するときは、家から少し離れた制作工房で制作し、属性などの魔法付加を加える場合は、霊樹の地下で行う。

制作した魔具は、特別に気に入ったものを除いて、人に売ったり材料と交換したりしている。

ジュラと取引をしているのは、エルフ、竜人、獣人などの亜人が中心だ。しかし、材料を求めて地底のドウェルグのところや、人間の街にも出向いたりする。

ジュラの作りだす魔具は、装飾よりも実用重視に作られている。付加されている魔法効果も、武器が持つ本来の長所を伸ばし、或いは短所を補うように施されている。

そうした結果、装飾に重点を置いていないのにも関わらず、削ぎ落とされた実用美を伴うようになった。

それらの魔具は、職人種族であるドウェルグたちにも認められているほどである。

ジュラの魔具には特有の刻印が刻まれているのだが、大地の女神であるユミルを模したその刻印から、ユミルの魔具と呼ばれるようになっている。

制作に没頭してしまうと、寝食を忘れて集中してしまう。好きな

ことは魔具の制作と昼寝。嫌いなことは面倒事と強すぎる陽射し。そして、魔力を宿した宝石、魔石を蒐集している。

トウヘッドの白金色の髪は、肩につかない程度で切りそろえられている。瞳は凍てつく湖のような薄い青。白い肌は滑らかで真珠のような光沢を僅かに帯びている。身長は１５０センチを僅かに超えるくらいで、小柄で華奢な体躯である。

容貌は絶世の、と言うほどではないが、多くの人が美しいと判断する顔つきである。

以上が、オズウェルが一ヶ月ほど一緒に生活して分かったジュラについての情報である。

そう、オズウェルが目を覚ましたあの日から、一ヶ月が経とうとしていた。ジュラはオズウェルの処遇について暫らく迷っていたようだが、オズウェルを助けたのは自分だし、人間ではない得体のしれない何かに合成してしまった責任もあると、オズウェルと生活をすることに決めたようだった。

「ソルスト帝国へ、行くのですか？」

「うん、次の旅はね」

夕食の時間。向い合わせに座り、豆のスープと小麦のパンという質素な食事の席のことである。オズウェルはジュラの言葉になんともいえない表情をした。

「オズウェルを魔の森（ナロモミ）に飛ばしたっていう、魔法陣を確認しておきたいな、てね。魔剣についても、何か分かるかもしれないし」

ソルスト帝国はオズウェルが騎士であったという国だ。中央大陸の西側に位置する巨大な軍事国家である。人間中心主義を推し進めているため、亜人と取引することが多いジュラは、一度も訪れた事のない国だ。

「・・・遺跡を視るだけだから、三日も掛からない予定だけどねぇ」

ジュラの話し振りから察するに、一人で行くつもりなのだろう。

「私も、同行してよろしいですか？」

オズウェルの言葉に、ジュラは僅かに戸惑うような視線を向けた。ジュラは、オズウェルが過去の記憶を刺激する場所を訪れる事で、傷つくことを心配しているようだ。

「大丈夫です。記憶は残っていますが、何処か断片的で曖昧です。今では現実味も薄れています。それに、私も国で確認したい事がありますから」

ジュラは多少迷っているようだったが、オズウェルの故郷でもあるので同行する事を認めた。

出発は三日後の早朝となり、それまでは、旅の準備を整えることになった。

＊＊＊＊

空に満月が輝いている。一ヶ月前、自分が生まれ変わったあの日と同じ、満月の夜である。

夜も深まり、森の生き物も牧場の騎獣たちも、そしてジュラも寝静まっている。オズウェルは一人、霊樹の根元に来ていた。オズウェルが産まれ出でる際、多くの魔力を失い枯れかけた霊樹は、何とか持ち直し、新しい葉を芽吹かせ始めている。

オズウェルは、まだ完全に回復していない輝割れた幹を撫でながら、そっと溜息をついた。

ジュラは霊樹の魔力の枯渇は、魔法と魔術の不適切な融合により引き起こされたと考えているようだ。だが、霊樹の魔力の枯渇はオズウェルがその魔力を吸収したために起きたものだ。

あのときジュラが、霊樹が枯れ果ててしまうことを厭わなければ、オズウェルは全ての魔力を吸い取るつもりだった。

そうなっていたなら、このような中途半端に幼い姿ではなく、完全な成体として出てくることが出来たはずだ。

幼く生まれてしまったこの身体は、未だに力を全て使うことができない。

オズウェルは霊樹の根元から離れると、月光の降り注ぐ、家の前へと歩いていった。

月光の中を進むにつれて、オズウェルの身体に変化が現れる。徐々に成長しているようだ。家の前に辿り着くころには、美少年の代わりに美しい男がそこに立っていた。漆黒の髪に異色の瞳、オズウェルの特徴を残しつつ、子どもの可愛らしさや甘やかさが抜け落ち、研ぎ澄まされた刀身のような鋭い気配の男だ。

オズウェルは成長した姿のまま家に入り、二階の寝室へと続く階段を上がる。寝室の寝台の上ではジュラが気持ちよさそうに寝ていた。

ジュラはオズウェルのこの姿の事を知らない。知っていれば、同じ寝具で寝ようなどと、思わないだろう。

オズウェルは寝台を揺らさぬように、そっと腰掛けると、ジュラの頬に優しく触れた。ジュラが起きる様子はない。暫らくの間、ジュラの寝顔を見つめていたオズウェルだが、額に口づけを一つ落とすと、そっと傍を離れた。

次の瞬間には、見慣れた美少年の姿で寝台の横に佇んでいた。

「だめだな、まだ足りない」

オズウェルは幼い顔には不似合いな、険しい声で呟くと、溜息を一つ落としてから、ジュラの横に滑りこんだ。

ジュラは隙間から入ってきた冷気に、僅かに眉根を寄せたが、直ぐに規則正しい寝息をたて始めた。

オズウェルがジュラに伝えていないことは沢山ある。少年の姿が本当の姿ではない事。人間であったころのこと。遺跡と魔の森（ナロモミ）で起きた事件。そして、魔剣の正体と消えた魔具の行方。

それら全てをオズウェルはジュラに話していない。そのわけは、オズウェルにとって、それらが些末なことだからだ。

過去の自分も、過去に自分の身に起きた事象も、もはやオズウェルにとって何の価値にないものになった。

そう、ジュラの手によって生まれ変わったあの日からに。

7　遺跡にて

遺跡は草木に埋もれ、元の姿を見出すことが難しいほどに、崩壊が進んでいた。

この中に、オズウェルを魔の森に飛ばした魔法陣があるという。

――・・・うーん。微かに魔力を感じるけどなぁ

黒の森を出発して一日半、ジュラとオズウェルは遺跡に到着していた。昼を少しばかり過ぎた時刻である。

徒歩なら一月、馬などの地上を走る騎獣を使用して十日の道のりだ。

一日半でたどり着けたのは、空を飛ぶ獣系の騎獣の中でも、最高速度を誇る天虎であるヴァスだからである。

「・・・中に入るのは、無理そう、ですね」

「そうだねぇ」

遺跡の入り口があったと思われる場所は、激しく崩れており、入り口は完全に塞がってしまっていた。中に入ることは出来そうもない。

「どうしますか？」

旅装束のオズウェルが、ジュラを見上げてくる。濃いグリーンのローブを羽織った黒髪の美少年である。小柄なジュラよりも頭一つ分ほど背が小さい。見上げてくる眼は紫と金の異色の目である。

「うーん。せっかくここまで来たんだし、もう少し遺跡の周りを探索したら、今日は近くで休もうか。」

「そうですね」

2人の荷物は少ない。ジュラは背に弓やを背負っているが、オズウェルは完全に手ぶらに見えた。寝泊りに使う道具はヴァスに載せている。

ジュラが遺跡の探索、オズウェルはヴァスに乗っている荷物を解き、宿泊の準備をすることになった。

遺跡は古びていたが、太古のというほど古くはないようだった。遺跡は、高さ3メートルほどの石版を円形に並べて造られていたようだ。中の様子は分からないが、おそらく半地下の構造になっているのだろう。ここに来るまでに、オズウェルから聞いたところ、内部は一階しかなく、広場のようのな構造になっているらしい。

そして、その中央の天井に魔法陣が描かれていたという。

「天井に、ねぇ。侵入者を防ぐ、罠なら分かるけど、一部屋しかないなら、入り口に仕掛けるよね？」

ジュラは遺跡を一周すると、激しく崩れている入り口のところに戻ってきた。崩れた瓦礫を足がかりに、遺跡の上に登っていく。

遺跡の上部は入り口付近が壊れているものの、ドーム状に造られていたようだった。上部は苔に覆われており、下の石材の様子は分からない。ジュラはロープの下から、ナイフを取り出すと苔をそぎ落とした。

「・・・んー。この模様は、確か」

苔をはぎ落とした石材には大、中、小、三つの三角形を重ねた模様が彫られていた。

「星読み、の民？ですか」

「うん、そう。多分その遺跡だねぇ」

野営テントの中で、ジュラはオズウェルに遺跡について判明したことを話していた。２人の前には、夕食の果物がある。

「２００年くらい前のものじゃないかな。星読みの民が栄えたのも、丁度そのくらいの時代のはずだから」

「では、あの魔法陣は、彼らの？」

「んー、実は、星読みの民は、占いの民族で魔術は使わない、呪術の民なんだよなぁ」

ジュラは夕食の果物の皮を向きながら、今日見た遺跡と、感じた魔力について思い出していた。

「と、いうことは」

「・・・オズウェルが見たっていう魔法陣は、この遺跡にあったものじゃなくて、誰かが後から施したものだと、思う」

そう、魔法陣と思われる魔力は、僅かにしか残っていなかったが、

それはどう考えても真新しいものだった。ジュラの話しを聞いて、オズウェルは考え込むように沈黙した。食事の手も止まっている。
その手は、指の形も爪の形も美しく、芸術作品のようにさえ見える。

「オズは、このことを知っていたんじゃないかなぁ」

ジュラの呼びかけに、オズウェルが顔を上げる。直視する事が罪に思われるような、美しい顔だ。特に、紫と琥珀色の目は本物の宝石でさえ、見劣りすような輝きを放っている。

「オズは、私に話していない事が、沢山あるねぇ」

きらりと、二つの宝石の輝きが増したような気がした。ジュラは眩しそうに僅かに目を細めたが、逸らすことはしなかった。

「ひょっとしたら、話せない、のかもしれないけど・・・」

オズウェルは無表情に沈黙している。そうしていると、完成された人形のようでさえある。

「それでいいよ。それで、いいと思う。私も、話してない事が、沢山あるからねぇ」

ジュラは美しい人形のようなオズウェルに、そっと微笑みかけた。やさしく、儚い、微笑みだった。
その表情を見て、オズウェルはそっと目を伏せた。

「ところで、オズの用事は明日でいいの？」

ジュラは、空気を変えるように努めて明るい声を出して尋ねた。ここへは、オズウェルも用事があって着ている。遺跡の損壊が激しかったため、調査の時間が短くなり、予定の日程を調整しなければならない。

「ええ、明日で大丈夫です」

「朝、早く発つ？日程に余裕はあるけど、遠い場所なら早いほうがいいよねぇ」

「急いで発つ必要は、ありませんよ」

「そう？」

「ええ、大丈夫です」

淀みないオズウェルの返答と聞いて、それなら明日の起床時間は、家と同じ時刻と言う事を決めて、二人は就寝した。

8　ソルスト帝国（前書き）

短めです

8　ソルスト帝国

時はさかのぼる。
一ヶ月ほど前、オズウェルがジュラの元で目覚めた満月の日まで。
ソルスト帝国の帝都クリスタバル。その帝国の城の一室に三人の男がいた。

一人は豪奢な椅子に座り、椅子に負けぬ豪華な衣服を身につけた壮年の男だ。もう一人は壮年の男の右手に立ち、純白のロングローブを身につけ、見事な白髭を蓄えた老人である。最後の一人は白銀の鎧を身につけた騎士で、部屋の中央を落ち着き無く歩き回っている。

「落ち着きなされ、グラジオラス殿下」

白髪の老人が、白銀の騎士を宥めるように声をかけた。壮年の男は、瞑想するかのように目を閉じている。

「ドゥーバ卿！この非常事態に、落ち着いてなど、いられるか！」

グラジオラス殿下と呼ばれた騎士は、白髪の老人、ドゥーバ卿に噛み付くように怒鳴り返した。本来で在れば、人目を奪う秀麗な白い顔（かんばせ）は高潮し、目は血走り鬼気迫る様相をかもし出している。

「そもそも！このような事態に陥ったのは、貴殿の用いた術に、欠陥があったためではないのか！」

グラジオラスは今にも掴みかかりそうな勢いで、ドゥーバ卿に詰め寄った。

ドゥーバ卿の表情に変化は見られないが、その目は鋭く剣呑な雰囲気をかもし出している。

「私の術に、落ち度があったと？申されるのか」

「そうだ！それ以外に原因は考えられん！！時も場所も、完璧だった。用意した素材にも不足はない！」

グラジオラスは声高にドゥーバ卿を攻める言葉を吐く。

「しかし、私はそちらにも原因が、在った様に思われますなぁ」

「なんだと！」

「私は、素材の状態が完璧ではなかった、という可能性もあると思いますのぉ。それに、最後の仕上げをしたのは、殿下ですからな」

「貴様！」

グラジオラスの顔はますます赤くなり、今にもドゥーバに殴りかかりそうである。ドゥーバ卿も表情こそ変化は見られないが、苛立った雰囲気が隠せなくなっている。

「やめよ」

終わる事がないように思えた2人の諍いを止めたのは、今まで沈黙していた壮年の男だ。

男の声は低く、深みのあるものだった。顔つきは厳しく、顎鬚が威厳と畏怖を与える体格のよい男である。

「見苦しいぞ、グラジオラス」

「っ、陛下！しかし、このままでは」

「分かっている」

陛下と呼ばれた男は、グラジオラスの言葉に短く答えると、椅子から立ち上がった。男はゆっくりと窓辺まで歩いていく。

「この事は、周辺諸国はもちろん、国内の貴族にも洩れさせてはならん。未だに、帝国内は落ち着いていない地域も多い」

眼下に広がるのは、帝都クリスタバルの街並みだ。早朝である今は、人気をあまり感じないが、あと一時間もすれば人々が行き交い、賑やかな一日が始まるであろう。

「だが、三ヶ月後には、聖護天の祭りがある。それまでには、何としてもみつけだせ。良いな、グラジオラス聖騎士団長、ドゥーバ魔道大臣」

男は有無を言わせぬ口調で、２人に命じる。

「全て、秘密裏に行うのだ。決して、知られてはならんぞ。・・・我が国の聖剣レーヴァティンが紛失していることを」

「はっ、承知」

グラジオラスとドゥーバ卿は、短く了解の返答をすると部屋を退室した。２人が部屋から出ていくと、男は中央に立ち、先ほどまで自分が座っていた椅子の後方に視線を向ける。

そこには、一振りの剣が掲げられていた。美しい鞘に収められた剣は、片手で振るうのは難しそうな大きさである。

「何処へ消えた？」

男の顔は険しい。

「剣だけでなく、死体までも」

そして、男の両目は紫水晶を思わせる、紫眼であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4327ba/

私の最高傑作は冥王です

2012年1月15日06時45分発行